

# 不便が世界を変える!?

不便システム研究所

川上浩司さん 十平岡敏洋さん

京都大学のどこかにあるというウワサの「不便システム研究所」。不便益って何？  
 どの誰が、どんなことを研究しているの？ なんだか気になる、謎の研究所——  
 その正体を確かめるべく、所長の川上浩司さんと広報担当の十平岡敏洋さんを訪ねた。

公式サイト・公式 Facebook

かもめブックス  検索

「不・便益」ではなく「不便の益」なんです

——「便利はいいことだ」という意識が根強い世の中  
 にあって、あえて不便の効用を掘り起こし続けていま  
 すが、そもそも「不便益」とは？

川上 手間いらずで効率的に要求が満たせる便利な道具よりも、むしろ不便な道具を使うほうがうれしいこと  
 とはありませんか？「オートマ車よりマニュアル車のほうが、運転している」という実感があって楽しい」

「電気鉛筆削りを使うより、ナイフを使ったほうが自分の思いどおりに削れて面白い」といった不便がもたらす効用（利益）を、私たちは「不便益」と名づけています。つまり、不便益とは「不・便益」ではなく「不便の益」のことなんです。

平岡 カメラもそうですよね。僕は大学時代に山登りを趣味にしましたが、そのころはフィルムカメラだったので三十六枚撮りのフィルムを五本くらい持つて山に行き、「今ここでこれだけ写真を撮ってしまうと、下山するまでフィルムが足りるかな？」と考えながら撮影をしていました。そうやっていると家に帰っ

て現像したとき、いつ、どんなシチュエーションで撮影したのか、そのときの記憶がよみがえってくる。

でも、枚数を気にせず何枚でも写真が撮れるデジタルカメラにしたら「一写入魂」の精神が薄れ、撮影した本人ですら覚えていない写真が増えてしまいました。しかもオートフォーカスだから、初心者でもそこそこの写真が撮れてしまう。便利で誰もが使いやすくなった半面、制約があるがゆえの工夫や成長する喜びが薄れてしまったのではないのでしょうか。

川上 「より便利なもの」が「生活を豊かにする」という考えが無批判に受け入れられ、結果としてそれが数々の技術進歩を促してきたシステムデザインの現場では、便利になったことで新たな問題も生まれていきます。たとえば、便利にする方策としてさまざまな場面で多用されている「自動化」は、作業者のモチベーションの低下や自分の手で修理や改善ができない機械をもたらしました。そこでこれらの問題を解決するために、便利の押しつけで見過ぎされてしまったけれども実は重要であったはずの事象——つまり「不便益」という視点から新たなシステムデザインの指針を探ろうと研究を続けているのです。



●かわかみ・ひろし  
 1964年鳥根県生まれ。京都大学大学院工学研究科修了。博士（工学）。京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット特定教授。著書に『不便から生まれるデザイン』（化学同人）。



●ひらおか・としひろ  
 1970年福岡県生まれ。京都大学大学院工学研究科修了。博士（情報学）。京都大学大学院情報学研究科助教。デザイン学ユニット構成員。